

挑発的ダイバーシティのための〈キャンプ〉論——成蹊高校スクール・ダイバーシティの現在地

成蹊中学・高等学校教諭 久保田 善文



0. スクール・ダイバーシティって？

「食べものの 名前じゃないよ ダイバーシティ」——これはわたしたちスクール・ダイバーシティの2016年度文化祭展示企画のひとつ「ダイバーシティ川柳」コーナーにあった一句で、まあ、半分はネタですが、だからこそ、このころがターニングポイントだったということをおぼろげにうかがわせる貴重な資料、とも言えそうです。

スクール・ダイバーシティは、2013年に発足した成蹊高校有志のダイバーシティグループで、ここ数年、「常駐」という感じなのはだいたい10名弱、生徒と卒業生と教員がそれぞれ持っているものを出し合って、この社会をよりダイバーシティな社会に——ということで活動しています¹。とはいっても、現実的なフィールドはわたしたちの学校、成蹊高校です。そして、高校でダイバーシティグループ、というのは、やはり簡単ではありません。めんどくさい人認定、意識高い系認定といったやっかいなハードルを越えてこないとそこに参加することはできません。つまり、なんとなく遠巻きにされる感じなのですが、そういう空気自体を変えていくことも目的のひとつです。もちろん、ダイバーシティを食べものの名前だと思う人はいなくなりましたが、一方で、「多様性/ダイバーシティ」といったワードが急速に一般化してきたことで、新たに、というか、実のところ根は同じような気もしますが、やっかいな課題と直面することになったと感じています。それは、ダイバーシティという言葉の「陳腐化」の危機であって、それが今度は「新しく古い標語」として遠巻きにされるような空気が、早くも構成されつつあるということです²。ダイバーシティはまだぜんぜん実現していないのに、です。

そこで、このコラムのテーマ〈キャンプ〉ということになるわけですが、きれいな湖畔で——っていうあのキャンプのことではないです。この春、わたしたちスクール・ダイバーシティに関わるメンバーの間で共有されたこの概念、〈キャンプ〉とは？そして、「挑発的ダイバーシティ」とは？スクール・ダイバーシティの現在地を見きわめつつ——。

1. 〈キャンプ〉ってたぶんこういうこと

〈キャンプcamp〉なモノ・コト・人物を見つける、おもしろがる、志向する——という態度はそれ自体〈キャンプ〉な態度だし、ダイバーシティな態度のうちでも最も挑発的な態度のひとつになり得るもので、それはきっと、ダイバーシティを横領しつつ、それを「新しく古い標語」「陳腐な標語」すなわち「行儀のいい常識」の枠に収めてしまおうとする社会的権威を動揺させるだろう——と、こんなことを直感したわけですが、これはけっこう当たってると思います。

¹ 活動の詳細についてはこちらを参照していただければと思います。<https://ameblo.jp/sksd14/>

² 「多様性」は白人虐殺の隠語だ(“Diversity” is a Code Word for White Genocide)。アメリカ白人ナショナリストたちの間ではこんなことも言われているようですが(渡辺靖『白人ナショナリズム』中公新書2020年)、日本では、現状、良くも悪くもそこまでの破壊力を持つには至っていないとみていいでしょう。

さまざまなレベルの社会的権威、むしろダイバーシティないろいろの妨げになってきたような権威が今、競うように「ダイバーシティ/多様性」を口にするというそのとき、ダイバーシティは角を削られつつ、横領されつつ、という状況にあるように見えます。「これを言うておけば、とりあえずPC的にも大丈夫、とにかく耳障りがいいしね」みたいな感じでしょうか。³ でも、その結果、PCの予感だけでいら立つ類いの人たちをダイバーシティから遥かに遠ざけるだけでなく、ダイバーシティ自体は、ぜんぜん実現しないまま、にもかかわらず、「新しく古い標語」に、そしてついには「陳腐な標語」になってしまうという可能性にさらされているような気がするのです。

「多様性はもうよくない？」

「十分配慮されてるのにさらに主張？」

「また口にしてはいけない言葉が？」

これは、フェミニズムをめぐる空気と相似ですよね。ダイバーシティの陳腐化が、結果、ミソジニー、マイノリティフォビア、ウィークネスフォビアをも増幅させることを危惧せずにはられません⁴。

「建前」としては広がりつつある。もちろん「建前」は大切です。建前は大事なことです。社会を変えることは建前を変えることだと言ってる人もいます⁵。例えば、日本中の校長が何かの式上、ダイバーシティやSDGsを取り上げて「素敵な発想ですよ」という感じで言及してくれるとしたら、それは、本当に大切なことだと思います。思いますけど、でも、ダイバーシティな運動がその段階で留まっているのは、ダイバーシティもSDGsも社会的権威のお気に入りとしてあつという間に「陳腐な建前」にされてしまうような気がするのです。無名の詩人のこんな作品はその辺りの空気に対する危機感の表明でしょう⁶。

朝礼で 校長がいう 多様性 SDGs ユネスコスクールに 選ばれました ——今すぐにアナキストを講えなければ

ここでの「アナキスト」を〈キャンプ〉に差し替えればかなりいけるんじゃない？——と考えてみたいと思います。これからのダイバーシティな活動には、社会的権威（例えば学校）をいつも何か意表を突いたやり方で出し抜いていくようなヴィジョンが大切になるのではないかな？ 陳腐化を逃れるための道筋をいくつも見つけて、そこをぬけぬけと歩いていくような知的機動力が求められるのではないかな？ そんなことを考えていて、そして、そこで効果を発揮するのが〈キャンプ〉なのではないかな、という、そんなことを考えているというわけです。

³ このあたりの感覚というか感じ方でおもしろかったのは、千葉雅也「ダイバーシティについて——否定性の複数性の肯定」<https://i-d.vice.com/jp/article/7k9pyd/d2021-masaya-chiba> 千葉さんは、こんな風にまとめています。「真のダイバーシティとは、資本を保全するための禁止を増やすことではなく、多種多様な否定性を通り抜けながら生きることの肯定であり、否定性の複数性の肯定なのである」。ここでの「資本」を「権威」に読み替えることも可能かと。なお、この千葉コラムについてはスクール・ダイバーシティ卒業生に教えてもらいました。

⁴ マイノリティ&マイノリティフレンドリーな言動に対するこのような攻撃の由来は、「現代的レイシズム」論や「ポストフェミニズム」論で説明できるように思います。前者についてはダイバーシティのブログに解説と文献紹介があります。<https://ameblo.jp/sksd14/entry-12429693521.html> 後者は例えば、菊地夏野『日本のポストフェミニズム』（大月書店2019）。これは最新の状況をまとめかつ考察したもの。あと、雑誌『現代思想』（48-4、2020）特集「フェミニズムの現代」。

⁵ 上野千鶴子さんの発言から。<https://digital.asahi.com/articles/ASM756K8VM75TIPE034.html>
<https://withnews.jp/article/f0190719000cc00000000000000000000G00110101cc000019475A>

⁶ 「right now!」(文芸ダイバーシティ@Slack)

それで〈キャンプ〉ってなんなの？っていうことですが、さっきも言ったとおり、ここでいう〈キャンプ〉は、きれいな湖畔で——っていうあのキャンプではぜんぜんないです(もちろん「〈キャンプ〉なキャンプ」の可能性については否定しません)。そうではなく、ここでいう〈キャンプ〉は、少しでも文系しようっていう人ならどこかで出会うはずの作家・批評家のひとり、スーザン・ソントグ(1933-2004)が提示したある感性、態度、スタイルのことで、それは、映画や絵画や小説や詩や音楽、さらには建築物からアクセサリー、ファッション他、あらゆる作られたモノやコト、人物のあり方、そして、それらを見るとき、あるいは評価するときの誰かの感性、態度のことなのです⁷。ちなみに、この〈キャンプ〉、今やセレブな感性の頂上決戦にも見えるメットガラ(メトロポリタン美術館コスチュームインスティテュートの資金調達のための祭典)が2019年のテーマとしたことで数十年ぶりに脚光をあびた概念でもあります。

さて〈キャンプ〉な感性、態度。それはソントグも指摘している通り、例えば、ドラッグクイーンをイメージすると分かりやすいかもしれません。いかにも「悪趣味」と言われそうな「不自然さ」や「人工的」な感じ、そして、これみよがしの「誇張」に、かえっておもしろさやカッコよさを見出すような感性、態度、つまり、常識的な、良識的な、行儀のいい感性や態度に抗って、「いや、これがいいんだよ、すごいナイス！」っていう読み替えができるような感性、そして、そんな読み替えの態度、要するに、過剰だったり、欠如があるのは明らかだけど、その過剰さの具合、欠如の仕方、誇張の在り方それ自体に惹かれるような、そういうことを楽しめるような感性、態度、これがざっくりとって、〈キャンプ〉な感性、態度なんだと思います。まあだから、〈キャンプ〉に定義はなくて、それはあくまでも感覚の問題であって、個々の趣味、センスの世界での話、ということになります。でもこれ、異質ないろいろを「異質だから排除」というのではなく、異質さの、その在り方におもしろさを感じるとっていうベクトルは、スクール・ダイバーシティの感性とも親和するような気がします。というわけで、ダイバーシティの世界に、より意識的に〈キャンプ〉な感性、態度を持ち込んでみてはどうだろう、とそんなことを考えてみたいと思います。そうすると、さらにこんなことをイメージすることも可能だからです。

II. リスキーだけど挑発的で効果的

「〈キャンプ〉なダイバーシティ」は、「ほどよい個性」や「都合のいい多様性」でお茶を濁そうとする社会的権威を慌てさせると思うし、そこには、アリバイみたいな、お題目みたいなダイバーシティを置き去りにするような推進力を期待できると思うわけですが、どうでしょう。もちろん簡単ではないです。過剰や欠如にこそ惹かれるとか、ときに意図的に過剰や欠如を作り出してそれをおもしろがるみたいな感性、態度。そこではときに、というかつねに、作為的な何かが要請されるし、そうすると「〈キャンプ〉を気取った痛いヤツ」になってしまうリスクもつねに取ることになるからです。そうなんですけど、でも、それもなんだかカッコいいと思うんですね。

例えば、ドラッグ・クイーンなんかもそうだと思いますが、学校のような社会的権威からすると「不真面目でやりすぎで悪趣味な失敗したユーモア」に見えるスタイルを突き詰める、おもしろがることのできる、そこにカッコよさを見出すことができるという感性、態度、それはたぶん〈キャンプ〉であって、そんな感性、態度とダイバーシティな感性、態度の相互乗り入れみたいな関係をイメージしてるんだけど、どうだろうーとい

⁷ スーザン・ソントグ「〈キャンプ〉についてのノート」(スーザン・ソントグ『反解釈』(高橋康也他訳/ちくま学芸文庫1996年)に収録/原著は1966年)

うことです。もちろん〈キャンプ〉は簡単ではないです。さっきも言ったように〈キャンプ〉は、それを意識した瞬間から「狙って外してる痛いヤツ」になるリスクとともにあるし、各方面からの反発も避けられません。なにしろ、スーダン・ソントグ自身が、こんなふうに言ってるくらいですから。

「…キャンプは部外者には近寄りにくいものだ。それは都会の少数者グループのあいだの私的な旋のようなものであり、自らを他と区別するバッジのようなものにさえなっている。…私はキャンプに強く惹かれ、またそれに劣らぬほど強く反発も感じている。」(ソントグ pp431-32)

でもソントグは、それでこそキャンプを考察することができるとも言ってます。意識しなくともはじめから〈キャンプ〉であるような誰かには、〈キャンプ〉を考へることも、真似ることもできないと考へるからです。まあ、そうですね、渦の中心にいたら、そこでどんなにうまく回っていたとしても渦自体を見ることはできません。つまり、「反発によって制約された深い共感」(ソントグ p432)こそが、〈キャンプ〉と距離を取りながら〈キャンプ〉を考へ、そして〈キャンプ〉を演じるために求められるというわけです。そうして再生産される〈キャンプ〉ないろいろに、周囲はおどろき、反発を感じつつ、惹かれる—それはつまり無視できない存在、そこから目が離せない何か。としたら〈キャンプ〉は、何かを発信して、何かしらの変化を生み出した誰かたちにとって、たいへん効果的な方法になりうるし、これ以上ないスタイルということになるんじゃないでしょうか？

無我夢中の結果としての〈キャンプ〉と演じられた〈キャンプ〉の関係についてもふれておきます。ソントグは、もちろん前者に分があると言うけど、一方で、オスカー・ワイルドのこんなひと言を引用したりもしています。オスカー・ワイルドは、存命中から今に至るまで、100年をはるかに超えて〈キャンプ〉でありつづけている永遠のクイアスター、といった感じでしょうか。

「人間を善いのと悪いのに分けるなんて、馬鹿げています。人間は魅力があるか退屈かですよ。」(『ウィンダミン卿夫人の扇』より)

Ⅲ. 「〈キャンプ〉についてのノート」について

実のところ、ソントグの〈キャンプ〉論自体がヒント集的散文的文章からなっていて、そこには〈キャンプ〉について58のポイントが徹密な仕切りなくつらつらと挙げられています。で、映画、絵画、小説、マンガ、そして、建物、彫刻から人物まであらゆるところに〈キャンプ〉が見出されては、「キャンプとは？」を示していくわけですが、でも、それによってその特徴が「浮き彫りになる」というようにはなかなかいきません。〈キャンプ〉はあくまでも感覚、感性、趣味の領域にあるし、ときに首尾一貫していないことだって、それゆえ〈キャンプ〉になりうるからです。つかめるのは〈キャンプ〉の傾向であって、その幅や奥行きは様々ということになるわけです。でも、だからこそ、「じゃあ、身の周りに〈キャンプ〉を見つけてみよう！」⁸という

⁸ こういう試みは大学の授業なんかで行われてるみたいです。早稲田大学創造理工学部建築学科の授業「課題」。ソントグの58ポイントをさらに24にまで絞った「ヒント集」が提示され、学生たちは、そこから〈キャンプ〉を想像して、それをデッサンで表現するというもの。チャレンジしてみたらおもしろいと思います。ただし、この「ヒント集」はあまり親切なものではないです。学生たちには、がんばれと言いたい。

<https://2017sekkeiensyu.wordpress.com/2018/02/21/c9%e3%80%8c%e3%80%8a%e3%82%ad%e3%83%a3%e3%83%b3%e3%83%97%e3%80%8b%e3%81%ab%e3%81%a4%e3%81%84%e3%81%a6%e3%81%ae%e3%83%8e%e3%83%bc%e3%83%88%e3%80%8d/>

ことになったときに「これ〈キャンプ〉だと思っただけど、どうかな？」が思いもよらないところから出てきたりするわけで、それはきっとおもしろい時間ということになるでしょう。際限なく〈キャンプ〉論が続けられそうだし、そんな議論のいかにもめんどくさそうな感じもナイスです。つまり、ソクタグのあの文章、「〈キャンプ〉についてのノート」は、永遠の〈キャンプ〉論のはじまりなのだ、ということはどうでしょう。

ソクタグの挙げる事例から〈キャンプ〉をつかまえる難しさは、他にもあって、それは例えば、そもそも彼女が挙げる作品や人物それ自体を知らない場合で、そうなるともう、それが〈キャンプ〉なのか否か感覚のしようもありません、痛恨です。じゃあ、その映画を観れば、その小説を読めば、「なるほど、これはキャンプだわ!」ということになるかということ、たぶんそうもならない。つまり、痛いのは、彼女が挙げる事例の歴史的社会的文脈、「そのとき」「その社会」の空気感が分からないということなのです。ちょんまげは江戸時代には少しも〈キャンプ〉ではないけど、今だったらなかなかの〈キャンプ〉でしょう。「今」「ここ」なら〈キャンプ〉な何かも、「あのとき」「あの場所」では少しも〈キャンプ〉でなかったりするということです。ソクタグもこのあたりの流動性については、はっきりとこう言っています。

「もちろん、キャンプの標準は変わりうる。これには時の経過が大いに関係がある。以前は陳腐だったものも、時がたつと奇想天外なものになることがある。」(ソクタグ pp448-449)

「標準」が変わる要因は、もちろん時間だけではありません。この点については、例えば、日本の高校では〈キャンプ〉だけど、アメリカのリベラルなカルチャーシーンではもう少しも〈キャンプ〉ではないといういろいろの可能性を思い起こしてみるといいでしょう。これについては、例えば、トドリック・ホールが成蹊高校にいたら——という想像をしてみたりしました。

でも、こうも言えます。日本の学校でなら、キャンプはそれほど難しくないのではないか、ほんの少しのハードルにトライするだけで、ハッとするような空気を作り出せるのではないか——。

ということで、「ノート」はあくまでも「傾向」をつかむためのヒント集ではあっても、必ずしも解答への近道ではないのですが、もちろん、〈キャンプ〉をつかまえるためにはマストです。なので、現代の空気感をふまえてとにかくまとめ直してみたので、参考にしてもらいたいのですが、まとめ直した「スクール・ダイバーシティ版〈キャンプ〉についてのノート」、ここに載せるにはちょっと長いかなということで、スクール・ダイバーシティのブログの方に掲載しました。そちらを見ていただいて、ああでもない、こうでもないという感じになっていただければと思います。こちらです。

<https://ameblo.jp/sksd14/entry-12639238103.html>

IV. むすびにかえて——挑発的ダイバーシティのために

コロナ休校中にメンバーの高校生たちが他校性も含めたオープンの「高校生 dunch」を企画、実施、その間の活動をリードしました。そして、これに興味を持って参加してくれた ICU 高校の生徒たちは、今ではレギュラー dunch の常連ですが、ぼくは最初に高校生 dunch の話を聞いたとき、おお!と思うのと同時に生徒部に話を通してないことがちょっと気になりました。まあ、何にしろ、報告して了承を取っておくに越したことはないわけですが、でも、以前なら、これ認めてくれるかな、とか、ストップ掛けられないかなとか考えるよりも、むしろ、学校はこの企画分かんのかな? 受け止められるかな? さあどう出るの? みたいなとこ

ろがあって、なんというか、もっと生意気というか、確信犯的、挑発的というか、つまり、より〈キャンプ〉なところがあったと思うのです。朝礼の時間を使って、メンバーが手分けして全クラスで「ダイバーシティ宣言」⁹のアピールをするとか、これ朝礼ハイジャックですね。何とかギリギリ通したこの企画は、やってやった感があつたし、学校全体のダイバーシティな意識にも少なからず影響を与えたと思っています。いずれにしても、この朝礼ハイジャック、企画段階から実施にかけては、わたしたちにとっても、学校にとっても緊張感のある時間で、だからこそダイバーシティなことを真剣に考える時間にもなったのだと思います。で、今、ぼくはこんなことを自覚しています——少しずつ、少しずつだけど、削られてる。わたしたちは、公認されていて、時間も場所も、少しならお金も使えるようになりましたが、でも公認されるということは、枠に収まることでもあって、わたしたちは何か大きな生き物の尻尾みたいなもので、本体なしではありえない存在になっている？ でも、さっきの朝礼ハイジャックのことなんかを振り返ってみると、尻尾がむしろ本体を振り回すようなことをもっとできるし、やっていけないともったいない。むしろ、そんなふうにすることが、めんどくさいことしか言わないわたしたちを公認してくれている学校への貢献につながるのではないか、どこか端のほうでおとなしく活動させてもらってるようなグループに留まるのではなく——と、そう考えたときに、これだろ！となったのが〈キャンプ〉論だったというわけです。このフレーズをもう一度あげておきます。

「…キャンプは部外者には近寄りにくいものだ。それは都会の少数者グループのあいだの私的な掟のようなものであり、自らを他と区別するバッジのようなものにさえなっている。…私はキャンプに強く惹かれ、またそれに劣らぬほど強く反発も感じている。」(ソクタグ pp431-32)

⁹ 「ダイバーシティ宣言」は通称で、正式には「多様性と平等についての宣言」というのですが、これを「生徒手帳」に載せようというのが活動の当面の目標でした。宣言の内容は以下の通り。

「多様性と平等についての宣言」

- * 成蹊高等学校の生徒は以下に挙げるものを含む多様性を受け入れ、それらを理由に誰に対しても、直接的にも、間接的にも差別、疎外をしません。人種、社会的性別、生物学的性別、民族的または社会的出身、国籍、身体的特徴、性的指向、年齢、心身の障害、宗教、文化、言語、家柄、家庭環境、学内外の所属または活動、趣味趣向など。
- * 成蹊高等学校の生徒は、学校内の平等が損なわれる場合、または、損なわれると感じられる場合、そのような言動に対してつねに繊細であることを心がけ、適切な方法でそれらの対処に努めると同時に、高等学校に対して、適切な方法での解決求めます。
- * 成蹊高等学校の生徒は、一人ひとりの多様性に寛容になり、互いにそれを尊重し合うような学校生活の実現を求め、多様性とその平等をないがしろにする全てを根絶するために努力を惜しみません。

テキストを作ったのは当時高3だった5人の創設メンバーで、このことを思い浮かべるたびに、なんだか誇らしいわけですが、それにしてもこれが未だに「生徒手帳」に載らないというのはどうしたことでしょう？